A trip in search of something～失われた記憶～

蓮宮　志奈多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａ ｔｒｉｐ ｉｎ ｓｅａｒｃｈ ｏｆ ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ
～失われた記憶～

【Ｎコード】
Ｎ７４０４Ｂ

【作者名】
蓮宮　志奈多

【あらすじ】
飛べ、飛翔し高く飛べ天空を舞い永遠の空へ・・・・・記憶をなくした主人公――ザイン・アイット。この話は夢の世界の創世から終焉までをえがいたお話です

＊（前書き）

現実は物語の世界と遥かにかけ離れている。誰もが百も承知であるように現実世界では奇跡や偶然、ハッピーエンドは滅多になく犯罪者は必ずニュースになるし、親友なんてもんは一生に一人か二人できるかできないか、仲間は裏切るし、車に引かれれば死ぬ。また、素敵なヒトと巡り合うなんてマンボウの子供が孵化する確立みたいに殆どないし、ＳＦ小説のように時間移動や瞬間移動、それに異次元に行くこともできない。そのことを考慮したうえでお読みください。

＊

今宵我、汝に問う。
荷物を軽くして欲しいか？
頭を軽くして欲しいか？
亡き母に会いたいか？それとも父か？
故郷に帰りたいか？
答えぬば一生悔いることになるであろう。
汝、大切な物を残して。
さぁ、答えるがいい。――天邪鬼
現実は物語と遥かにかけ離れている。誰もが百も承知であるように、現実ではハッピーエンドなど滅多になく、運よくよい仲間に巡り合うことなんてマンボウの子供が孵る確立と等しい。仲間は裏切るし、車に引かれれば死ぬ。また、瞬間移動はできないし、時間狂はできない。異次元にもいけない。死神などはいるはずもないし、妖精は存在しない。そんな夢のような世界は地球上何処に見ても無い。だから憧れるのだ。異次元――パラレルワールドに。しかし、幾ら探しても彼らの存在する空間などあるはずもなく、物語への憧れは夢で終わる。私も実はその一人で、今でこそ七十歳の老人だが、昔は異次元に憧れる少年だった時があった。いつも私の身に物語のような事が起きないかと思っていたが、結局、見事にその儚い夢の出来事は起きなかったが、それは“夢”という形でつい最近、私の身に実現した。今、私がこれを執筆しているのは夢の中であって、その辺りのフィクションはどうにか許しを請いたい。でもp、この話は私が夢の中で見た真実で塗り固められている。多少、表現の違いはあるだろうが、それは私の文才力不足ということで受け取ってもらいたい。あと、言い忘れていたが、この話は現在進行中で起こっているものであり、私の肉体はもう、この世には無い。最後にもう、二度と現世ではいわれることはないし、この後二度と出てくること

はないだろうけれども、名前を名乗っておこう。オストルド・ジャアンマン。ただのしがない爺さ。

では、私が語るにあたり、本来なら私がこの話の主人公である彼と出会った話からしたいものだが、残念なことに彼と私は殆ど会ったことがないので、この話の始まり――然り、ことの発端から始めたいと思う。私はもっと語りたいけれど、読んでいるヒトは飽きるだろう？なので、冗語はここまでにして、そろそろ始めるとしよう。

＊プロローグ

争いが絶えない“空虚の世界”フォークスに唯一つだけ争いごとがやまない国があった。本当は他にもあるそうなのだけれど、私は知らない。国の名はフェニックス。不死鳥と言う名が冠されたその町は、その名の通り人、龍、様々な生物が行き交う、四六時中大変賑やかな国だ。そして、悪意が生まれ、古来から“争いの発祥地”と言われ続けてきた地でもある。その南側には“空虚の世界”を取り巻く大海。偉大なる海が位置し、北は果てしなく山が続いていた。また、その偉大なる海と取り巻く港町からは日々他の国から魔法使いや武闘家。暗殺者から浮浪者まで船に乗せやって来ていてその人口は数知れず、しかし、その反面出て行く人も多かった。そういった人の中には盗賊になったり、浮浪者になった人が多かったがどれもこれも国が発祥してからずっと小物止まりで世間を騒がすような大犯罪者になったり、偉大な貢献を成し遂げた人もいなかった。しかし、丁度二十年前、王族であるメディフィフス家の没落が始まると同時期にアレクと言う巨大な魔法使いが姿を現した。彼は、黒く長いマントを羽織り、手に冥王の書を持っていた。彼はその書に記載されている禁忌の呪文を唱え、同盟国である水色の国を滅ぼすと、ドラゴンを操り、大戦争へと世界は突入した。第一の戦場になったのはその昔太古の町セロがあったとされる地区で実に三万人以上の死者をだした。それから暫く事件の余韻を残すも彼は音沙汰無しで事件は収束したかに見えた。だが、それからさらに十五年後の春（今から五年前）、占いババのお告げを受けた子供が十歳と言う節目に時期に達すると、また彼は現れ、その子供の住む村の近くで一度町を荒らした。当然、近くの民衆は力を合わせて立ち向かったが全くの無勢。そんな中お告げを受けた子供は立ち上がった。彼の名はタグラスといい、この話の主人公となる人物である。彼に出会うと、アレクは龍の動きを止め、彼に向けて問うた。

『汝、今問う。荷物を軽くして欲しいか？頭を軽くして欲しいか？それとも故郷に帰りたいか？答えぬば、汝、一番大切なものを失うであろう。』

龍に乗る者は杖を掲げた。

『――――。』彼は答えなかった。何を聞いているのかわからなかったからだ。

『答えぬば――――、汝の一番大切なものを奪うとしよう。』彼の頭には、その言葉が響き、消えていった。その後、僕は宙に吹っ飛び、海辺の町であるエリンスに倒れていた。しかし、彼の記憶は微塵も無く、ただただ頭を抱えていた――――。

第一章　旅立ち　＊1＊運命

僕の名前はザイン・アイット。僕の夢は冒険家になること。
偉大なる海の沿岸の町エリンスに住む十五歳だ。趣味は日記で、色々なことを想像することが好きだ。僕に親はいない。なんでも、五年くらい前俺の親は俺を婆やに託し旅に出たらしい。でも、五年以上前の記憶が俺にはなかった。
というより婆やによると既に託されたとき記憶が無かったらしい。
その日も俺は町に一つしかない図書館で本を読み耽っていた。
表題Ｆｉｌ　ｄｅ　ｍｅｍｏｉｒｅ（記憶の糸）。三世紀以上前のブリオ公国の有名な作家が書いた話だそうだ。名作中の名作でとある王国の王子が徐々に記憶がなくなっていく庶民の娘と恋に落ちる話だ。何度か読んだ小説だが、何度見ても面白い。
“私は思い出を残すことはできないの・・・・。”目に涙があふれ始める。気付いたら本が濡れていた。
『また、お前は本読んでるのかよ？』
唐突な質問と共に頭に鈍い音が響いた。――殴られたのだ。
『いってぇ・・・・』僕は頭を抑えた。『小説は面白いんだぞ！オストルド。お前も一度くらい読んでみろよ。』
『ヤダネ。本なんて糞くらえだ。第一本さえ読めねぇんだぜ俺は。』
確かに、この町には本を読む人は少なかった。殆どの人はきちんと教育を受けてないヒトばかりだし、別に本など読めなくても魚さえ取れればいいからだ。でも、僕は何故か読めた。気付いたときにはもう本が好きで文字が読めたのだ。そして、読む理由はもう一つ。
“記憶を取り戻すため”だ。誰も教えてくれない。ぼくの記憶。昔、婆やに聞いたことがあったけど、“ザインの両親はこの街にきた尋ね人じゃからの”としか教えてくれなかった。だから、本を読めば自分の記憶ことがわかるかもしれないと思ってぼくは本を読んでいた。

でも・・・・・本が読めるってこと――すなわち文字が読めるってことは、“記憶のあったころは裕福だったのかもしれない”そしたらどんなにいいことだろう？毎日食事にありつけて、毎日いい服を着れる。あぁ、なんて素晴らしい。

時折、そんな妄想をする。

貧乏人が多いこの街では食事に毎日ありつけるかもわからなかった。比較的、家の婆やは裕福なほうだったがそれでも二日に一度くらいは食事が無い。もう、慣れっこだったが腹は嘘をつかない。いつも空腹でいた。また、着ている衣服も汚かった。洗濯などは殆どできないし、量もパ―ツごとに二枚程度。よっぽどお日様の日が強くない限り洗濯はしなかった。無論、衣服屋も、浜辺に一つ。航海する人しか殆ど寄らない店だった。

しかし、“スラム街”（本で読んだ。貧乏人が多く、凄く荒れている町だそうだ。）みたいな荒れている所は無く、町民の仲がよかった。“港町”と言う割りに栄えてなかったからなのかもしれない。それは、隣の漁村アースにはとても大きな港があって、そこで“広大なる台地”との貿易を全部してしまうからだった。でも、この町の人たちは彼ら――アースの人間を憎んだことはなく、寧ろ受け入れているくらいだ。

ある時、隣の家のおっちゃんが話しているのを聞いたことがある。

『わしらの町はなぁ、アース村で、失敗した人間が築き上げた村なんじゃ。』

だから、この町はこれでいいのだ。とおっちゃんは言う。僕はこの町の“のんびりさ”と“優しさ”そして、“仲のよさ”は好きだったが、皆のアースに関する見解はあんまり好きじゃない。アースに負けてたまるものか。と時々思った。

『おい！ザイン。何ぼ―としていやがんだ？』不意に呼ばれて後ろを振り向いた。

『え・・何？』

『あぁ？また、なにか考え事してたのかよ。』

『うん・・・』
僕は本を読んで考え事をしていると周りが見えなくなる。いつもの癖だ。悪いとは思っていても直せない。恐らく、もう遺伝子に“考えると止まらなくなる”という癖が刻み込まれているのだろう。
『はぁ～』急に彼は溜息をついた。『そんなに――記憶を探すのが大事か？今が楽しければいいんじゃねぇの？』
彼に――何回か聞かれた言葉。僕はこういうときいつも決まってこう答える。
『未知なる事実を探求することが、僕の楽しみでもあるんだよ』
これも遺伝子に組み込まれたものなのかもしれない。僕はふと思った。
彼はまた溜息をつくと言った。
『それはご苦労なこって。ところでザイン。そういえば明日の聖霊祭の神子(みこ)はエラノールちゃんがやるってよ。よかったな！』
彼は僕を肱でツンツンと突き僕は思わず微笑を浮かべてしまった。
聖霊祭というのは、毎年年一回行われるエリンス唯一の祭典で、その神子に選ばれるのは由緒正しいことなのだ。今年選ばれたのはエラノ―ル・リディアで僕の五年来の友達で町一番の美人でもある女性だ。
『そうだね。』僕は頷いた。『そういえば、聖霊祭のことに関して町長に呼ばれているんだった。』僕は急に思い出すと、椅子から立ち上がり、図書室を出た。オストルドは苦笑した。
『ちぇ、もっとエラノ―ルに優しくしとくべきだったぜ。』

この町の町長はエラノ―ルの父方の爺、ノスだった。この町の町長は代々“町の英雄”が継ぐもので彼――ノスは１０年以上前、エリンスの第三地区に流れる川の決壊を止めたそうだ。時々、エラノ―ルに逢いに行きがてら町長の家を訪れると話してくれる。
『すいません。遅れました』
僕が到着すると、町長は“座りなさい”と言って席を勧めた。僕は

お辞儀をすると勧められた椅子に座った。
『久しぶりだの。』ノスは優しい目で僕に言う。『ザイン、大きくなった・・・・・』
『ご無沙汰してます。』僕は頷いた。『それで、話とは？』
『これこれ、急くでない』彼は僕を諌める。『エラノールに嫌われてしまうぞ。』
僕は不意に赤面した顔を隠した。
『ところで、君は明日聖霊祭を以って、十五歳になるんだったな？』
『はい。』僕は頷いた。
――――そろそろ、“あの”お告げがこの子にも話されるころかの。
『ザイン。』彼は見透かされそうな声で僕に言った。『明日、聖霊祭が終わったらここにもう一度来なさい。大事な話をしてあげよう。』
『え？』それだけ、だろうか？
『そうじゃ。今回ばかりはエラノールに言伝を頼むより本人に言ったほうがいいと思ったからの。』彼はニヤッと笑った。『まぁ、明日になればわかるであろう。それだけ重要な話なのじゃ』
僕は知らなかった。この時、全ての“運命”は決まっていたのだ。
もし、この時“僕の宿命”を知っていたら怖気ついてしまっただろう。後々のことになるが、僕は町長に感謝した。
★今始まる――長い長い話。この先、彼には何が待ち受けるのだろう？

第一章　旅立ち　＊2＊　ねじねじの森

前述したように聖霊祭は年に一度開かれる祭典で、大まかな内容はまず村の聖堂まで皆で行進をし、神様に祈りをささげて、神子が呪文を唱えてお告げをする。そして、成人を迎える者達が一言述べて大合唱を始める。といった具合だ。僕はいつもただの参加者でしかなかったが今年は十五という成人の年を迎えるので、色々しなければならないことがあった。日が登る頃に聖堂に向かい、準備を手伝うのだ。

『おぅ、ザイン――早いな。』

僕が聖堂に到着すると、オストルドのお父さんがいた。オストルドはいないか？と辺りをキョロキョロしていると小父さんは言った。

『俺の息子なら――おそらく、未だベットで鼾（いびき）をかいて寝てるよ。』

聖霊祭の準備に遅刻寸前の息子を起こさないとは――、僕は笑ってしまった。

暫く時間が過ぎた――。お昼時になり休憩の時間になるとオストルドが家のほうから走ってきた。

『おいおい、もうお昼時だぞ。聖霊祭準備に遅れるなんてたいした度胸だな。』

『悪ぃ、お袋が寝坊したのを知って急に怒り出してさ。二時間ぐらい説教食らってた。恥をかけだってさ。もう十分恥かいてるっちゅうのによ。』

彼は苦笑した。よく見ると目が赤い。きっと、泣いたんだろうと思う。

『まぁ、いいさ。午後からはちゃんとやってくれ。ところで、昼飯食べたか？』

『もち。昼飯？いんや、あのおばさんは食べさせてくんなかった。』

そう言うと彼は僕の弁当から肉団子を手で取ると口の中へ運んだ。

『あぁ・・・うめぇ。誰が作ったの？これ。』

『エッエラノールが、持ってって。って』僕は思わぬ不意打ちと、言ってることの恥かしさに赤面してしてしまった。
『なにそれ。羨ましい！』
彼は“羨ましすぎる罰だ！”と言うと僕の弁当箱を取り、残っていたご飯を全部平らげた。
『うん。ようやく腹の虫がおさまった。もう二食も食ってなかったもんな。』
オストルドは僕んちより遥かに貧乏だ。週三日は食べられない日があるし、何分四人兄弟だ。一人当たりにあたる飯の量が少なかった。
『ちぇっ、今回だけだぞ。』僕はいつもこうやって許す。彼が僕より遥かにお腹が空いてると知ってるからだ。
そうこうしていると、あっという間にお昼休みが終わり午後の準備が始まった。祭りは日が完全に没してからなためまだまだ時間はあったが、それでも残っている“祭り前にやらなければいけないこと”を全部こなそうとすればギリギリか時間が足りないくらいだった。
僕達（僕とオストルド）は神子が首にかける螺旋花の冠（ねじばなのかんむり）の材料を取りに村の北側にある“ねじねじの森”へ入るよう言われた。

婆ちゃんに聞いたことがある。昔、ねじねじの森はこの辺り一帯に広がっていた。それを、アースから来た裏切り者が開拓して町を作った。（当初は漁村アースに負けないように。という意味を込めて作られた為、“町”と名づけられた。）しかし、ねじねじの森には古くから神様が住んでいて開拓した者達に天罰が下った。
開拓の責任者が木が倒れてきて命をなくし、開拓に参加者達は次々に病魔に襲われた。
そこに、一人の少年が現れた。名を“エリンス”と言い父と母がアースで自己破産をし、泣き泣きこの町へ逃げてきた。彼の父は引っ越すときに自殺し、母は開拓事業に参加していなかった為、その家族は災厄から免れた。彼はねじねじの森の深部にある聳える岩山に向かい、町の住民の代表としてねじ神様に祈った。

『どうか、ねじ神様――我らの行いを許してください。もう、二度としません。たくさんお詫びはします。』
少年の思いが通じたのかそれから数日もしない間に開拓者を襲った謎の病魔は無くなった。そして、開拓した町の名は少年の名をとってエリンスと名付けられ、代償として“福”を失った。（しかし、神のご意思で仲の良さが増え、貪欲を消し去った。）そして、年に一度神への手向けとして聖霊祭が行われるのだ。聖霊祭が行われなかった年は人の命を手向けとして。
だから人々はねじねじの森には一年に一度しか近づかないことになっていた。
それでも、年に一度――螺旋花の冠の材料を取りにいくときは神秘的な出来事が起こると言われていた。
今日も神秘的なことが起こるのだろうか？僕は不安と共に微かな期待を抱いていた。昔から冒険が好きだった僕はこういうことには慣れっこだ。暗いのは平気だし、このスリル溢れる緊張感が俺の心を躍らせた。
しかしオストルドはびびっているようだった。入る前とは一転、さっきから辺りをキョロキョロ見回して僕の服を掴んでいた。
『ねぇ・・・早く――ここから出ようよ・・・。』彼の声は震えていた。
『ねじねじの冠って何で作るんだっけ？』
『ぇえ・・・と、森の中央にあるねじの大木の花・・・だった気がする。』
もう、森へ入って小一時間はたった気がした。しかし、辺りは真っ暗で目の前は殆ど見えなかったので、進んでいるかさえもわからなかった。
『イタッ！』
声と同時にオストルドの姿が見えなくなった。僕は焦らずゆっくりと後ろずさると、何かにぶつかる。立ち上がってからそれがオストルドの体だと言うことに気付いた。

『痛ぁ・・・・』オストルドは鼻を擦った。『しかし、ここ足場悪いなぁ。暗いし良く見えないや。急に歩くの怖くなったし。』
『全く。相変わらず、暗闇が苦手だな。お前は。』
『お前に恐怖心はないのか？』
『再三再四言ってるだろ？僕の心にあるのは未知なる事実を探求することだけさ。その為なら何処にだっていけるさ。』
僕はオストルドの手を手に取った。そして、一歩踏み出す。
『馬鹿！危ねぇ・・・・』
不意にオストルドのバランスが崩れ、僕を道連れに穴へ落っこちた。ヒュゥゥゥと風の鳴る音がして、気付いたときには微弱の光で照らされた洞穴にいた。
『ここは・・・・？』
僕は呟いたが返事する者は誰も居ない。洞穴の中で僕の声が木霊した。
あれ、オストルドは・・・？僕は気付き洞穴の奥へと進んだ。辺りは進むにつれ次第に明るくなっていき、大きな広間に出た。そこには天井から巨大な木の幹が地下に向かって伸びていた。
『ねじの大木・・・？』
その木は僕が生まれてこのかた、一度も眼にしたこともないような巨大な木だった。
あっ――と息を呑まれる圧倒感――。オストルドを探すことも忘れ心が躍った。
『・・・・！』
不意に甘い香りがした、僕はその場に倒れた――――、

第一章　旅立ち　＊3＊　聖霊祭

ヒュウウウウウ・・・ヒュウウウウウウ
風が抜ける音がした。雲が動き隠れていた太陽が覗く
ここはどこだろうか？
僕は死んだのか？辺りを見回してみる。芝生――、僕を囲うように円状に木が生い茂っていた。
『――気がついた？クスクス』
不意に女の子の笑い声が聞こえてきた。
『だっ、誰？』
『私？私は君に一番近くて遠い存在よ。そして、君の全てを知ってるの。』
『ねじねじ様なの？何処にいるの？』僕は訊ねた。
『ううん。私は・・・・。ごめんね、まだ言えないかな。――何処にいるの？って？私は何処にでもいて何処にもいないの。』
『僕の正体を知ってるの？君は。』
僕は“見えない――声だけの存在”の言葉に驚き、訊ねた。
『えぇ――私は君に伝えに来た。君がするべきことを。ううん、君が私に託した言葉を』
僕――僕は誰なのだろう？
ずっと知りたかったのに、いざ知るときになって不安が溢れ出した。
『僕が――――君に託したの？昔の僕が。僕のするべきことを。』
『そうよ。』
『そんな筈、ないじゃないか。僕の記憶は幼少のころだけないんだよ。』
『ううん。詳しくはまだ言えないけれど、君は私に託したわ。君がこれからするべき使命を――。未来の君に伝えるようにね。』
『え？』
『だから、私は伝えなくちゃならない。それが君の運命であり、君

の事実であり、君の未来であることを。』
『運命――？』
“見えない――声だけの存在”の言葉に僕は困惑した。何を言っているか僕にはあまりわからなかった。
『最初は判らないと思う――。』彼女は僕の心を見透かしたように言った。『でも――』
ヒゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ・・・・また、風の抜ける音がして僕はまた意識を失った。

『イン――ザイン――』
誰かが呼ぶ声がする。僕は眼を開けた。
『よかった！』急に誰かに抱きつかれる。吃驚して顔を上げた。
『エ、エラノール！！』
『心配したんだよ・・・・・ザイン君』エラノールは目に涙を浮かべていた。
『ザイン――君はねじねじの森の入り口に倒れていたんだ。』
ノスの声がした。振り向くと大勢の人が僕とエラノールを取り囲んでいる。僕はちょっと照れくさくなった。
『そうだ！オストルドは――？』僕は辺りを見回した。何処にもいない。エラノールが口を開いた。
『オストルドはね――私の家で寝てるよ。少し前、倒れてるのをお父さんが見つけたの。ちゃんと、ねじの花は彼が持ってたわ。』
ほっとしたのか、涙が僕の肩に落ちた。僕は思わず彼女を抱きしめた――。
『ごめん。心配かけて。僕は大丈夫だよ。』
『よし！二人も見つかったことだし――聖霊祭の準備をさいか～い！』
暫く時間が過ぎてから、一人が言った。
皆、ぞろぞろと声に従い僕達を離れていく。最後に僕とエラノールだけ残った。

『さっ、行こっか。』
彼女は僕の手をとり、立ち上がると笑った。
『そうだね！』
ありがとう――エラノール・・・・。僕は彼女にお礼を言った。
しかし、この先ずっと――彼女と会えなくなるとは思いもよらなかった。少なくとも、このときには

ボーンボーンボーン・・・・
低い三度の鐘の音と共に聖霊祭は始まる。
先頭に神子のエラノール、次に町長のノス――そして、僕達“成人”の子供達――いや、大人達が参列する。
皆ゾロゾロと蟻のように並んでゆく。その間僕達は一言も喋っちゃいけない。いや、この間だけじゃない。成人の大合唱を除いて神子以外は式の間中喋ってはいけない決まりなのだ。
『皆さん！祈りをささげましょう・・・・』
聖堂の前まで来ると、エラノールは予め置かれた台に乗り、大声で言った。そして、頭から“螺旋花の冠”を取り上げると“ねじの神”を象った石像にかぶせた。
途端辺りが暗くなった。“聖霊のお告げ”が始まったのだ――。
不意にエラノールの体が浮いた。
『ザイン・アイット――旅を告げる鐘は鳴り響いた。
もし、君が未来を見たいのならば
もし、君が夢を見たいのならば
もし、君が記憶を戻したいのならば、昔を知りたいのならば
旅に出るがいい。
見つけるがいい。　キミの記憶を。運命を。未来を。
世界が闇に覆われ――その時代を救うべく生まれてきた者よ』
『え？』
エラノールの足が地面についた――。
『本当のお告げ――？』

本当は聖霊祭のお告げは皆で決めた“決められた言葉”を告げなければならない。
でも――――
気を失ったときに見た不思議な夢とお告げは重なる。
僕の記憶のヒミツ・・・
僕の運命・・・
皆がざわつき始める。神子のエラノールが口を開いた。
『ザイン――己の記憶を。運命を。未来を知りたくば旅立つがいい』
この状況――聖霊祭では彼女しか喋ってはいけない。それはわかっている。でも、今すぐ口を開きたかった。なぜなら、僕は彼女が今の言葉を言いたくないように見えたから。勿論、僕自身も今のお告げに驚き戸惑いを隠せなかったが、お告げだけではなく夢まで見た以上彼女の言葉に従わなければならないように思えた。
ボーンボーンボーン・・・
合唱が終わり、三度の鐘が再び鳴り響いた。この瞬間より人々は話してよいことになる。皆は再びざわめきだした。
『ザイン――が・・・なんだって？』
皆僕の話題をしているようだ。僕は神子のエラノール、そしてオストルドと共に皆に気付かれぬよう聖堂を出た。
出るとすぐオストルドが口を開いた。
『ほんとに――ほんとに――あれはお告げだったのか？』
『え？』
『いや、“私を旅に連れてって”的な愛の告白かと・・・・』
『ううん。そうだったら・・・いいんだけどね。』彼女は僕を見て照れくさそうに笑った。『でも――、あれは本当なの。急に意識が朦朧としてきて気付いたときには口が勝手に動いてた。そして、皆に聞こえないようにその声は言ったの。“その旅には――彼一人で行かなければなりません。仲間は彼が見つけるはずです。そのことは貴方から彼に伝えなさい”って。私涙が出てきそうになった。でも、堪えた。私はねじ神様の神子だから。』

彼女の目に涙が溢れた。
『でも、今はいいでしょ？もう、今は神子じゃないから。』
彼女は僕に抱きつき泣いた。まるで、僕に“行かないで欲しい”というように。僕も泣きたかったが、我慢した。あとで泣こう。そう思った。
オストルドは暫くその光景を見ていたが、『悪ぃ、俺先に帰るわ。』と言うと、町に戻った。
気のせいだったかもしれない。その目に涙が見えた。その時改めて実感する。あの“お告げ”がどれだけ今からの自分の人生を狂わすことになるかを。

第一章　旅立ち　＊４＊　お告げ

僕は夕べいけなかった町長の家に向かった。昨日の今日なのでエラノールに合うのは恥ずかしいが、彼女と会えるのはこの先いつかわからない。今日ぐらいは自分の“恥ずかしさ”というものを捨てよう。

『ザインか――、遅かったな。まぁ、座れぃ。』

ノスは僕が入ってくるとすぐさま座るよう促した。周りを見渡すと誰もいない。エラノールは・・・？僕は訊ねようとしたが、とにかくノスの話を先に聞くことにした。

『あぁ――美味しい紅茶はいかがかね？』

『頂きます。』

『砂糖とミルクは・・・？』

『砂糖だけ・・・大匙２杯。』

暫くしてノスの奥さんが“大匙二杯の砂糖が入った紅茶”を持ってきた。とほぼ同時にノスが口を開いた。

『ありがとう――。ところで、ザイン。君は昨日聖霊様にお告げを受けた。何故自分が？って、疑問に思わなかったかい？』

『いえ――、きっと僕の正体に関係しているんでしょうけど・・・。』

正直、何故僕が？なんてあのとき思わなかった。それよりも、“自分”が何処かに行ってしまう。それを泣いてくれた彼女たちがどれだけ自分のことを好いていてくれたのか。それを改めて実感し嬉しかった。

そして、――自分の記憶を探しに旅に出なさい。と言われたとき、“未知なる世界を見れる”とワクワクした。

全然、何故だ？なんて思っていないのだ。勿論、旅に出たい。とは言わない。ずっと平凡な人生を彼女達と送るのは楽しいはずだ。

『君は大変賢い子だね。やはり君は神に愛され不思議な運命を背負

った子供――いや、昨日でもう大人か？――だよ。そして、恐らくこれからもね。』
『どういうことです？』僕はノスの長い話を聞いているのが煩わしくなって思わず訊ねた。
『焦るでない。ザイン。君はいつもちぃとばかし事を焦りすぎじゃ。何事も求めようとすることは大切じゃが、よく言うじゃろ？遥か南方の国の諺で“焦る者は損をする”とな。』
町長はゆっくりと僕を宥めるように言った。しかし、焦るな。というほうが無理な気がする。僕は気が長いほうじゃないし、何より知りたいのだ。真実を。
『でも――知りたいんです。できるだけ早く真実を。』
『君らしいのぉ・・・・。よかろう。教えてあげよう――君は婆やに子供を預け旅に出た両親の子供じゃないのじゃ』
『え？――』
一瞬、彼が名に言ってるか僕にはわからなかった。頭が混乱した
『混乱してるだろう？それはそうだ。今まで自分の両親は婆やに自分を預けて旅に出た。とばかり思っていたんだろう？しかし、それは違う。お前は、５年前の聖霊祭の日、不意に聖堂に雷が落ちお前がフワフワと浮かんで落ちてきたのじゃ――。ねじ神様の像の前に。』
『僕は――この町の住人じゃないって言うことですか？』
『そうじゃ。君は神から授かりし子なのじゃよ。神の恩恵を多大に受けておる』
流石に驚きを隠せない。神の恩恵を多大に受けている――、そんなことを言われても実感がわかなかった。
『ザイン――旅立ちなさい。あのお告げは本当だ。己の探究心を満たすために――記憶を求め、使命を果たすために旅立ちなさい。』
ノスは笑った。『なぁに、寂しくなったらいつでも帰っておいで。この町は君の故郷だからの。』
『小父さん・・・・』僕は思わず目から涙が出た。『ありがとう―

―、ところでエラノールは？』
『エラノール――あぁ・・あいつなら・・・』小父さんの声を遮るように小母さんが叫んだ
『た、大変――エラノールが・・・エラノールが・・・・何処にもいないの・・・・』
エラノールが・・・・？どうやら、まだ旅に出るのは早いようだ。
僕はドアを開けると、彼女を探すべく町へと向かった。

第一章　旅立ち　＊5＊　ペンダント

ここは何処だろう？　私は尋ねるように呟いた。
ここ？ここは“――”よ。
なにか、言ってるようだ。私には聞こえなかった。
どこにあるの？貴方はだれ？
貴方の町よ。私？私の名は――
誰かがそこまで言いかけたところで私はまた意識を失った。

僕は町を駆け巡り、エラノールの名を大声で口ずさんだ
『エラノール！エラノール！！何処にいるんだ？』
町中の人が振り向いた。僕は構わずその名を繰り返した。けれども、返事は返ってこない。姿も見えなかった。
いったい何処にいったのだろう？
この町で彼女が行きそうなところは限られている。ふと、昨日の泣き顔が脳裏に浮かんだ。
ねじねじの森だろうか？
それなら、町の中心と反対方面だ。僕はまた彼女の名を大声で叫びねじねじの森のほうへ引き返した。

ねじねじの森――
太古からその森の中に入ることは聖霊祭の日を除き、恐れられ、禁じられてきた。
正直、森の目の前まで来たとき僕は躊躇（ちゅうちょ）した。
また、気を失ったらどうしよう。本当に森の中にエラノールがいるのだろうか？
確かにエラノールがここにいる。っていうのは僕自身の予想であって彼女がここにいる“明確な理由”はない。
でも、もし彼女がここにいないとすれば、少なくともグッと命がま

だある確率は高くなる。
でも、本当のことを言えばそうでなかったのかもしれない。心の奥底で“エラノールがいるのはねじねじの森”という理由もない確信が渦巻く。僕はねじねじの森に入った。
やはり暗い。昨日、入った時はオストルドがいる。という安心感と“今日は入らなければいけない日。ねじ神様の逆鱗に触れることはない”という妙な納得からくる安心が恐れを半減していた。
しかし、今はそんな安心という守りもなく、僕は怖くなった。けれども、“もしエラノールがこの中にいたら”と思うと進まなければならない。僕は奥に向かってゆっくりと進んだ。
できるだけ扱けないよう足に気を配ったつもりだったが、限がない。思った以上に凸凹してる。この前一度しか転ばなかったのが不思議くらいだ。
『エラノール！！』
僕は大声で叫んだが、森の中で木霊しただけで返事は返ってこなかった。
やっぱりいないのだろうか？いやいや、昔・図書室の地図で見た限りねじねじの森はエリンスひとつ分くらいの大きさがあった。もっと先にいるかも知れない。
『エラノール！！・・！』
不意に転んだ。地面にぽっかり穴が開いてる。よく見ると昨日転んだところにそっくりだった。
『危ね・・・・』
僕は起き上がるとさらに先に進んだ。
暫く、何の変哲もない唯の林道が続いた。徐々に暗闇に目も慣れ始め、入り口よりだいぶ見えるようになった。ふと、足を止め空を見上げる。
真っ暗な空――完全に木で覆われていた。
『大木か・・・？』
ふと、前に視線を落とすと先のほうに大木が見えた。僕はそれに向

かって進んだ。
ザッ・・・ザッ・・・
身の丈ほどの草を掻き分け、大木の前に出た――。
一面金色の光に包まれた広場・・・・空を見上げると眩しい陽光が目に入った。
『こんなところが在ったなんて・・・・』
僕は眼が慣れるまでしばらく俯いていたが目が慣れ前を見ると人が倒れているのが見えた。
『エラノ―ル・・・・・?』
僕はすぐさま駆け寄った。寝息を立て眠っている――。僕は安心し安堵の息を漏らした。
『――ん・・・んぅん・・・ザイン・・・君?』
『よかった。無事だった――・・・』
思わず僕は彼女を抱きしめた。目から涙があふれ出た。
『ここ――どこ?』
『ねじねじの森の中だよ――。心配かけやがって・・・・』
『ザイン君・・・私ね。決めたの。』彼女は言った。『勇気を出してザイン君と別れよう。って。この町のことを心配しなくてもいいように旅立たせてあげようって。』
彼女は僕の首に螺旋の花で作ったペンダントをかけた。どこから来たのか気がつくと僕らの周りには動物達が集まっていた。
『ねじねじの森にこんな綺麗な場所があったなんて・・・・知らなかった』
『きっと、ねじの神様が知らせなかったんだと思う。こんな綺麗な場所を――動物達の楽園を――知らせたくなかったから。』
そうなのかもしれない。僕は妙に納得してしまった。
『ありがとね。ザイン君』
彼女は僕の頬にキスをした。そして最後に大木にお礼を言い、クスっと笑う。
『じゃぁ、戻ろっか!』

第一章　旅立ち　＊6＊　旅立ち

貴方は何が欲しいの？
誰かの声がする。
『僕は何もいらない。何か自分の知らないものを知れればそれで十分だ。』
ほんとに？
『うん。ほんとにほんとだよ。』
じゃぁ貴方の夢って何？
『夢・・・、冒険して探検してあっと驚きたい。』
宝物を探してお金持ちになったり、強くなって魔物と戦ったりしたいの？
『ううん。知るだけでいいんだ。その過程で、記憶を取り戻したいな。』
知らないで記憶だけ取り戻すのは駄目？
『うん。嫌だな。それは――。旅に出てこの目で確かめたい。この世界のこと。』
そう。なら、私の声を覚えておいて。いつかまた会えると思うから。きっと運命がそうさせるはずだから。
『うん。わかった。』
“僕の名前はザイン・アイット。僕の夢は冒険家になること――”

ピピピピピピピピピピピピピ・・・・・
目覚ましが鳴る。僕は夢から目覚めた、
『何の夢だろう？見たことある気がする。』僕は呟く。カーテンを開き窓を開けた。
『う～ん・・・・いい天気だ。』
空を仰ぐ。再びこの地の空を眺めるのはいつになるだろうか？ふとそんなことを考えてしまった。

『そういやぁ、ザインが今日旅に出るんだってな――』
町中の人が僕の噂をしていた。照れくさかったが彼らに会うのは最後かもしれない。と思うと涙が出そうになった。扉のノックオンが聞こえた――
『押忍！、お前の最後の顔覗きに来たぜ！』オストルドだった。
『いつ出発？』
『そうだな。昼頃かな・・・・』
僕は笑う振りをする。彼らの顔を見たら益々別れが辛くなった。
『おいおい、どうした？冒険は前からしたかったんだろ？』オストルドが僕の顔を覗いた。
『あぁ――・・・』
『わかった。俺等と別れるのが辛いとか？』オストルドは鼻で笑う。
『いいか？使命とか――運命だとか、ごちゃごちゃ考えちゃいけないの。行きたければ行く。行きたくなければ行かない。それでいいじゃん。運命なんて勝手に決められるもんじゃなくて、自分で切り開いていくものなんだ。お前は“冒険”がしたいんだろ？記憶を探すため――己の探究心を満たすため。でもな。もし嫌なら旅立たなくてもいいんだぜ。俺たちと馬鹿話して一生過ごしてもいい。』
オストルドは『それが決まってから旅立てよ。』というと手を振って家を出て行った。
そうなのかもしれない――オストルドの言う通りだ。僕は自分の心に訊ねてみた。
“ねぇ、僕――旅に出たいのかな？”
目を瞑って旅先のことを考える。魔法――怪物――巨大な森――湖、山・・・・。
心臓の鼓動が高くなる。胸に手を当てた。
ドクドクドクドク・・・・心臓が激しく脈打った。
ふと、今朝見た夢を思い出す。
“僕の名前はザイン・アイット。僕の夢は冒険家になること――”
冒険家――。ちっちゃい頃から憧れてたっけ・・・・・・

行きたい――旅立ちたい――使命とか、世界を救うとか、そんなの抜きにして。
僕は用意していた道具を持って一目散に家を出た――

衝動的？うん、そうかもしれない。
急に胸がドキドキして、今すぐ旅に出たくなった。
『決まったのか？旅に出るか出たくないか？』町の門のところまで来たとき、誰かが僕に声をかけた。長年付き合った仲だ――。僕にはそれが誰かわかった。
『決まったよ。オストルド・・・・エラノール・・・。僕は行きたい』
『そっか。』オストルドは言った。『頑張れよ。』
『さよなら。なんて言わないよ。』エラノールは抱きついた。『またね。』
こうして、僕のたびは始まりを告げた。

“旅立て――
困難に果敢に立ち向かい、進んでゆけ。
君の夢を叶えるために。
君の未来を描くために”
ノスは天を仰ぐ。
『神の子ザイン・アイットに幸あれ・・・・』

第一章　旅立ち　＊6＊　旅立ち（後書き）

第一章　旅立ち最終話です。皆さんご愛読感謝です。
コメントくださった皆さんありがとうゴザイマシタ。
何日も間を空けて考えた割には全然なってませんね。
とてもへたくそです。
でも、頑張って書きましたのでどうぞ温かく見守ってください。

第二章　フェニックス　＊7＊　空の国の姫君

大国フェニックス・澄湖上空――
『大変だ。お嬢様が――エレナスお嬢様がいない・・・・』ボロロは叫んだ。
『探せ！探すんだ。幸いここは空中汽艇内だ。何処かにいるはず・・・・！！』
『どうした？ライオ・・・・・！！』ボロロはライオが見ていたほうに目を向けた。
『お嬢様――！！』
気付いた時にはもう遅かった――、エレナス・ローワン空の国の姫君は、空中汽艇から飛び降りた。

大国フェニックス西部　タラス城下町メッカ――
僕はあんまりこの町の事を知らないけれど、エリンスの図書館にあった文献によればこの国で一番賑やかで治安がいいところらしい。
とにかく僕はその町にたどり着いた。
『暗い（ネガティブ）方お断り！フェニックス一賑やかな町メッカへようこそ！』
町の入り口の門にでかでかと彫られた文字――。少なくとも静かな町でないことだけはそこからうかがえた。
一歩門の中へ足を踏み出す――
そこはまるで別世界だった。大きな谷のようになっていて、そこから町全体が見渡せる。町の大半を占める商店街、住居の数々・・・・
そして、サルゴ王が住むタラス城！
まさに絶景だった。絵でしか見たことない世界。これこそ、旅に出る醍醐味だ。
僕は階段を一目散に駆け下り、商店街へと入った。
『魔法の書店――なんでもあります。』

僕は一番傍にあった色あせたショーウインドウを覗く。端の方に薄れた文字が見えた。【フォークス暦００３５年創業（アヴァロン暦に治すと紀元３０年くらい）】
古い――僕は思った。図書室の本を読んである程度は知っていたつもりだったけれど、これほど古いとはさすがに思わなかった。

バリンッ
突然、ガラスの割れる音がした。僕は吃驚して振り向いた。
『あぁ？文句あるのかよ、この飲んだくれ。』怒鳴り声が聞こえた。耳を突き刺すようなかん高い声だ。どうやら、揉めてるらしい。
『俺の半分も生きてない若僧が。俺に切れるとはいい度胸してるじゃねぇか？』
『あぁ――？』
若者はナイフを取り出す。そして、酔い潰れた男に向けた。
『全く。近頃のガキは、刃物（こんなもの）に頼らないと自分の身も守れないのかい？』
酔った男は酒瓶を殴り捨てて、若者に襲いかかった――
刹那、僕には何が起きたかわからなかった
唯、そこには若い男が倒れていた。
『安心しろ。死んでないさ――』酔いつぶれた男は誰に言うわけでもなく独り言のように呟くと、魔法の書店の向かい側の酒屋に入っていった。
僕は若い男に駆け寄った。脈はある。息もしている――。
あの一瞬に何があったんだろう？
僕はあの男にもう一度会いたくて――酒屋に入った。

《モリ―小母さんの愚痴酒屋》
とても大きな看板の下にＷＥＬＣＯＭＥの板がぶら下がっている。
僕は中へ入ると、そこから見える一番奥の席に座った。
『やぁ・・・おや？見慣れない顔だね。名前なんと言うんだい？』

バーテンが訊ねた。
『ザインっていうんだ。エリンスから来た』
『あの町から来たのかい。私の名はモリー、この酒屋のオーナーさ。よろしくね。ところで、ザイン、何頼むんだい？』
『何があるの？』
『牛乳に酒類全部――、大抵は何でも。』
『じゃぁ、ミルクで』僕は言うと、辺りを見回した。額に傷がある男――、いかにも金目当てで男を誘惑している女――ん？いた！酔い潰れた男だ
『モリー・・・さん？』僕は戸惑いがちにモリーに訊ねた。『あの、帽子を深くかぶったヒトって誰ですか？さっき、外で喧嘩してた』
『さぁね。名前はティムとか言ってたよ。なんでも、昔は彼も強いヒトだったらしいが、二人の子供が盗賊団セルに誘拐されて、行方知らずになって以来、ずっと飲んだくれさ。』
『誘拐された？』
『そうだよ』彼女は溜息をついた。『セルは何でもやるからね。金のためなら。』
セル――エリンスの町の図書館には“目的不明の謎の集団セル。その集団は全員特別な力がある。”程度の簡単な記述しかなかった。僕はまた訊ねた。
『でも――誘拐して何をするつもりなんですか？』
『さぁね。なんせ目的不明の集団だもの。彼らが何考えてるか誰も知らないさ。この前だって――空の国ウルータミリアのお姫様が彼らに誘拐されたしね。』
『空の国ウルータミリア？』
『あぁ――、そういえばあんたはエリンスから来たんだっけ？田舎町までは情報は行かないからね。空の国ウルータミリアっていうのはね。誇り高き空民が住む、巨大空中楼閣国家さ。そこでは、地上とは比べ物にならないほど研究が進んでるらしいよ。まっ、詳しいことはわからないけどね。空民は謎の民族だから。』

空の国――、エリンスの本には彼らの記述は一文も無かった気がする。僕はつい、悪い癖で空民のことを知りたくなった。僕は訊ねたが、『これ以上詳しいことは他の人に聞いてくれ』だそうだ。僕は彼女にお礼を言い、お金を払って酒場を後にした。

出て行くとき、一度ティムに目を向けたが彼はまだ、酒を飲んで酔いつぶれていた。

第二章　フェニックス　＊7＊　空の国の姫君（後書き）

長らくお待たせいたしました！

第二章　フェニックス　＊8＊　サーカスのチケット

『魅惑の絶技“フリークサーカス団”――紅い月が丸くなるとき上演。』
僕の目に飛び込んだポスター。それは酒屋から二ブロックほど離れた場所に壁一面張られていた。
『フリークサーカス・・・・』僕はそのききなれない言葉を呟いてみた。自分の“本棚（きおく）”を覗いてみたけれど、その言葉に該当する書物はなかった。
有名なサーカス団なのだろうか？ふと、その通りを見回してみる。先のほうに小柄な男が見えた。しかも、よく見るとこのポスターを壁一面に張っている張本人のようだ。
『すいません――』僕はその男に駆け寄って訊ねた。『あの――このサーカス団の方ですよね・・？』
小柄な男は少し驚いたような顔をしたが、殆ど間をあけずに答えた。
『そうですが。』
『“フリークサーカス団”ってなんなんですか・・・・？』
『一言で言ってしまえば、異形の衆が行う珍しい芸でございます。お客さん――』
『貴方も――？』僕は失礼なような気がしたが思い切って訊ねてみた。
『いえ――』男はお辞儀をした。『私はこのサーカス団の団長を務めております、フロン・マグナルといいます。』
『そうですか。失礼しました。団長さんがポスターはりなんて大変ですね。』
『いや、それが結構楽しいんですよ。』団長は笑った。『どんなお客さんが見に来てくれるんだろう？このポスター見てどう思うかな？とか、いろいろ考えちゃうんで。』

『へぇ――、がんばってください。』
『あっ、待ってください』僕は立ち去ろうとしたが、団長の声がして、振り向いた。『これ、差し上げます。よろしければ是非――見に来てください。』
【“魅惑の絶技フリークサーカス団メッカ公演”時刻＊紅い月が丸くなる時】
『あの――紅い月って・・・』僕は訊ねようとしたが、そこにはもう団長はいなかった。
『どこいったんだろう？』
僕は呟いたが、もしかして先にいるかもしれないと思いその通りを直進した。やっぱり彼の姿は見えなかったが、遠くのほうに宿と書かれた看板が見えた。よくよく考えると、エリンスからこの町までずっと野宿してきたから、止まるところなど考えてなかった。
『えっと・・・』僕は呟き、ポケットを探った。『５００マリ・・・・』
５００マリ。一言で言えば一日の宿泊料の半分くらい――ということは、今日も野宿するしかないということだ。
『どうしよう――。』
僕は悩んだ末、とりあえず、宿に向かうことにした。

カランカラン・・・・
僕が宿の扉を開けると、一面暖色の景色が飛び込んだ。僕は目の前の受付に駆け寄った。
『あの、ここの宿泊料金って幾らですか？』
『お一人様１泊１０００マリでございます。』受付の人は言った。
『一番安い夕食なしで夜だけですと――２００マリになります。』
２００マリ――普通の宿はその料金では提供してくれないので迷ったが５００マリしかない貴重なお金を使うのは避けたかった。
『っ――そうですか。』僕は立ち去ろうとした。しかし、ここでしか訊ねれるところはないと思いあのサーカスについて訊ねた。『あ

の――紅い月が丸くなる時っていつかごぞんじでしょうか？』
受付の人は急に話しかけられて驚いていたようだが、笑って答えた。
『ハハ、フリークサーカスですね？結構訊ねられるんです。えっと、多分――明日のことだと思いますよ。明日の日没の頃』
僕は受付の人に礼をいい宿屋を後にした。

『――この町か。』イザベラ・バットゥーダは手を城下町メッカに翳した。『一つ――いや三つぐらいありそうだ。』
『おい、イザベラ！本当だろうな？』彼女の隣にいた男は呟く。『嘘だったらお前を殺すぞ』
『案ずるなよ。大丈夫だ――成功したら約束の金額のマリは渡す。』彼女は笑みを浮かべた。『但し、生きてたらな。』
『なら――大丈夫だ。お前に殺されるほど俺は弱くないからな。』
『私は殺さない――、それは約束するが、あれを手に入れるときに死ぬかもしれない。』
『そんな危険なものなのか？』男は言った。『ナニが隠されてる？』
『そんなちっぽけなものじゃない。もっと、怖い物だ。ただあれ単体では何も意味をもたらさないから安心しろ。でも、あれがあると、その場所に怪奇現象をまきおこし、自体を守ろうとする。』
『つまり、あれが自分を守ろうとしてあらゆる手を使うから気をつけろってことだろ？』
『そうだ――』彼女は頷いた。果たしてこの男にそれができるのだろうか？また前の男同様に死ぬんじゃなかろうか？あるいはその前の男同様に逃げるんじゃなかろうか？
彼は一応この町一腕利きの“略奪屋”だと聞くが、前の男もその前の男も町一番の腕利き“略奪屋”を雇った。しかし結果があの様だ。結局自分で手に入れる嵌めになってしまった。
『それなら、大丈夫だ――』男は言った。『さて、そろそろ略奪開始といこうかね。』

第二章　フェニックス　＊８＊　サーカスのチケット（後書き）

長らくおまたせいたしました。
やっぱり、会話は相手がいないと辛い物ですねｗｗｗ
そろそろ、パートナーを登場させようかと思います。

第二章　フェニックス　＊9＊　笛使い

城下町メッカ・紅い月が丸くなるとき――
僕は、あのサーカスの公演を見に来ていた。
『ようこそ――“魅惑の絶技フリークサーカス団メッカ公演”へ！
今から始まる絶技はこの世では滅多に見られない不思議な不思議なサーカスです。大変危険で怖いので、肝っ玉が小さい人、お一人の方はご遠慮下せぇ。お？さぁ、サーカスが始まるようです。慌てず焦らずお座り下さい・・・・』
大弾幕が開けられとてつもなく大きな光に照らされた円形状の舞台が姿を現した。
『まず、最初は――鰐と人間の半獣のカラモス・バラックです。』
甲高い音――恐らくトランペットの音――が数回鳴り舞台に緑色の皮膚をした人間が現れた。叫ぶほどの怖さもなかったが手は鎖に繋がれていて、凶暴そうだ。
『おぉぉぉ！』僕は黄色い？歓声を上げた。昨日は野宿で少し疲れていたけど、始めてみる面白い怪物に好奇心が抑え切れなくて、疲れなんてもう吹っ飛んでいた。
『皆さん。ご覧下さい。彼は一見凶暴そうに見えますが、実は理性があり、少しお茶目――』途端に、
司会者の（遠くてよく見えなかったがあれは絶対昨日会った団長だと思った。）男が飛ばされた。男は必死にマイクを持ち直し、笑った。
『えぇ――少しお茶目なところもあります。』
会場がどっとが笑った。僕は投げられた司会者に怪我がないか目を細めてみたが、驚くことに血さえも出てないようだ。司会者は続けた。
『彼は――父親が鰐でして、時々発狂するのです！でも、ご安心ください。』司会者は軽く口笛を吹いた。途端彼は大人しくなり、口

笛にあわせて踊りだした。『どうです？』
司会者は笑った。そして、指を鳴らすと半獣は踊るのを止めた。そして、彼は司会者に擦り寄った。
『彼はさっきはとても緊張していましたが、実は大変人懐っこいのです！』
ささっと彼を連れてきた女の人が彼の鎖を掴み舞台裏まで引っ張っていった。
『さぁて、お次のフリークは――死を呼ぶ男、ララバイ・ア・デルです！』
司会者はそれだけ言うと、ささっと舞台の端に寄った。プシュ―と煙が吹く音がして舞台の中央に真っ白な――血の気を失せた男が現れた。
『彼は――・・・・』司会者はそこまで言うと、ララバイのほうを見た。そして、口を閉ざすと変わりにララバイが口を開いた。
『僕の名前は――ララバイ。死を呼ぶ男。僕の家族は皆死んでいて、このフリ―ク団に会うまでは、関わってきた友人は皆死んでしまった。え？何が面白いのかって？特技は何だって？ふふ、知りたいなら教えてあげるよ・・・・』
彼は独り言のように呟くと、息を吸った。途端――背中に寒気がどっと走った。氷のように体が寒い。思考が奪われる――
あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝・・・・・
叫び声が聞こえ、何処かで人が倒れる音がした。僕の体から力が抜けた。

あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝――

ここは何処だ？誰かが死んでいる。ああああああああ
不意に何かが頭に流れ込んできた。痛い――今にも頭が割れそうだ。
途端に吐き気がして僕はその場に嘔吐した。
『――』司会者はララバイの口を押さえた。それと同時に頭の痛さ

は薄れ、吐き気もおさまった。
『彼の能力は“死の風”生気をなくし、幸せの記憶を奪い、辛い記憶を蘇らせ脱力させる。アレを続けていると、その者は魂が抜け落ち、死に至ります。』
『そういうことだよ――』
ララバイはそう呟くと、舞台裏に去っていった。それと同時に担架に運ばれ、数人の人が観客席から出ていったが、気絶した人たち以外、皆ショーに魅入っている様子で誰も席から立とうとしなかった。
『ったく、やってらんねぇぜ。金とはいえ。』誰かが僕の背もたれに足を置いた。
『馬鹿か?声が大きいぞ。』
どうやらカップルのようだ。僕は抗議するのは諦めて彼らを無視した。
『はいはい。イザベラさん、了解しましたぁ。ところで、あれはまだなんですか?アレは』
『あぁ』女のほうが答えた。『未だ、反応してない。』
『そうっすか――』
『どうでしたか?』パラパラと拍手が聞こえる。上のカップルに気をとられていているうちに一つフリークを見逃したようだ。『お次は今回のショーの目玉――動物使いフロー・オーゼットォォォォ』舞台に一人の身のこなしのしっかりした男と数十匹の動物が現れた。男は言った。
『こんにちは。フローといいます。私は前の三人と違い――ちゃんとしたヒトです。』
ピュロロロロロロ・・・・
男は笛を吹いた。途端に動物達は男に近づき擦り寄った。男は言った。
『今から彼らを操ります。私が提案してもつまらないので、皆さんどう操って欲しいか言ってください。』
『はい!』三列ぐらい隣の男が甲高い声を上げて手を上げた。『そ

の中で一番大きなライオンの上に乗って会場を一周してみて下さい。
』
『いいでしょう。』男は答えた。そして、笛を口につけライオンの上に跨ぐ。
ピュロロロロロロロロ・・・
笛の音と共にライオンが駆け出した。あっという間に会場の半分を過ぎ、僕の横も通った。
『アレだ！』上で声がしたが僕は無視した。
『ウォォォォォォ』と歓声が上がる。気付いたらもう彼は舞台にいた。
『どうでしょうか？』彼は観客に大声で訊ねた。『何でもできますよ？人間ができることはね』
わっと観客達が沸きあがる。今度は僕と反対側にいた女の子（恐らく）が手を上げた。
『ネコさんと踊って！！』
『勿論』男は彼女にお辞儀して答えた。『ピュロロロロ・・・・』
笛を口に銜えると、数匹の猫が彼に近づいてきた。猫は肩車のようにして彼と同じ高さまで繋がると彼の手をとった。最初は下のほうの数匹がフラフラしていたもののフロ―が笛を吹くと揺ら揺らも止まり、踊りだした――。
『ズンチャッチャズンチャッチャ・・・・』
お世辞にも彼の歌は上手いとはいえなかったが、凄く面白かった。暫くすると、他の動物達も彼の歌にあわせて踊りだした。
『ズンチャッチャッチャ――！』
彼の歌が終わりを告げると同時に動物達は踊るのを止め、舞台に並んだ。司会者は言った。
『いかがでしたでしょうか？お次は――』
僕は座席に乗っかっていた足が無くなっていたのに気付くと後ろを振り向いた。
『あれ・・・？』そこには誰もいなかった。僕はまぁ、いっか。と

思うと次のフリークを見るべく、舞台に顔を向けた。

『いかがでしたでしょうか？私たちフリークサーカス団は年中無休！またのお越しをお待ちしております。司会は私・フリークサーカス団の団長フロン・マグナルでした！！』

最後の女の子の綱渡りが終わり、最初と同じく、甲高い音が数回鳴り、ショーは終わりを告げた。

第二章　フェニックス　＊９＊　笛使い（後書き）

つかれましたぁ――

第二章　フェニックス　＊１０＊　奪われた笛

同日　夜

『本当に――本当にお前が欲しかったのはこれなのか？』男は首を傾げ笛を掲げた。

『あぁ――』イザベラは頷く。『ご苦労だったな。まさかあそこまでやってくれるとは思いもよらなかったよ』

『これで、報酬の三分の一な。』

『あぁ、勿論だ。この調子であとの二つも奪ってくれ。』

『へぇへぇ・・・・』男は溜息をつく。『俺は詮索はしないほうだけどよ。気になって仕方ねぇんだわ。教えてくれねぇ？これが欲しいわけ。唯の笛じゃん』

『ふん――お前如きにはわからないだろう？』イザベラは笑った。

『少なくとも、金のためなら命まで奪ってしまう略奪屋にはな。』

『命か。んなもん――今の世の中じゃァあってないようなもんでしょ？今のこの世は無法地帯なんだからさ。』

『そうだな。数十年前には自治体と名のつく国家権力が制圧していたらしいがな。いまは反乱軍のお蔭で衰退しているようだ。』イザベラは地面を睨みつけた。

『誰かを恨んでるのか？』男は訊ねた。

『恨みか――そんな幼稚なものじゃないよ。』イザベラは言った。

『何べん殺しても晴らせない程、憎んでる。』

『全く。気が強いとはいえ一応女なんだからさ。もうちょっとさ、可愛くなれば？』

『そうか？でも――』

『みつけたよ――』

イザベラの言葉は僕の言葉に遮られた。

時は遡り3時間前――

ショーが終わりを告げ、観客はゾロゾロと会場を後にしていた。僕は団長にお礼が言いたくて、舞台のほうに降りた。
『あの・・・ありがとうございました。』僕は団長を見つけるとお辞儀をした。『凄く面白かったです。とっても興奮しました。』
始めてみる――芸。僕の記憶という本棚に彼らのことが追加されたのは言うまでもないことだった。おそらく、あの興奮は絶対忘れないだろう。
『おぉ、昨日の少年か。』団長は驚いたように僕の顔を覗いた。『それは良かったよ。どのフリークが一番面白かったかな？』
『無い！無いよ・・・・・』僕の答えを遮るように舞台裏から叫び声がして僕と団長は振り向いた。
『どうした？』
『ないんだ――僕の笛が。』フローは言った。『何処にも無いんだよ。確かにここに置いたはずなのに。』
『落ち着け――フロー。本当に無いのか？ゆっくり焦らず探してみなさい。』
やがて僕と団長が探すのに加わり、他の団員も（ララバイ以外）彼の笛を探すのを手伝った。しかし、一時間程度探しても笛は見つからなかった。
『本当にここに置いたのか？』団長は念を押すようにしてフローに訊ねた。
『あぁ・・・・』
彼は舞台の上とはうってかわって弱気な声を出した。そういえば、彼のショーの最中後ろの奴が『あれだ。』だの『反応した。』だ言って気付いたらいなくなっていた。もしかしたら、彼らと関係あるのだろうか？
『すいません――』僕はフローに訊いた。『少し色っぽくて美人のお姉さんと、強そうな男のカップル今日見かけませんでした？』
『え？』
『いや――、あのフローさんが僕の隣をライオンに乗って駆けたと

き、後ろの二人のカップルが笛を見て、“あれだ”だの“反応した。”などいって気付いたらいなくなってたんですよね。』
『色っぽいお姉さんと強そうな男ですか？』なんと途中割り込んできたのはララバイだった。『今日、そういえばフロ―さんの出番の最中、舞台裏に来てましたよ。』
『本当か？』フロ―はララバイの体を揺さぶった。『いま、そいつらは何処にいる？』
『さぁ――？』ララバイは首を傾げた。『最後のネネさんが終わるときまで舞台裏にいたようですがね。』
『そいつらが盗んだにちげぇねぇよ・・・・許せねぇ・・・』フロ―は机を叩いた。そして、僕の胸倉を掴むといった。
『おい、坊主！やつら二人の容姿を教えろ』
『ちょっとフロ―・・・！』
だんだんだんだん――声が遠ざかってゆくのがわかった。僕は意識を失った。

・・・・イン――？ザイン――？

誰だろう？女の子の声がきこえた――

ねぇ――私の声が聞こえる？
『え？』僕は答えた
久しぶり聖霊祭以来だね――
『誰？』僕は訊ねた
もう忘れちゃったの？私が誰か
ねじねじの森で会ったでしょう？
『思い出した』僕は言った。『僕に旅立ちを告げた人でしょう？』
そうよ。私は君に旅立ちを告げた者。君をこれから、導く者
『なら、いつか教えてくれるの？』
うん。でもまだ時が満ちてないから――教えられないよ

大丈夫。
私は何時でも君の味方だと
君と約束したから
『・・・・』
笛を盗んだ犯人を捜しているんでしょう？
でも、肝心の犯人が何処にいるのかさえわからない――
『なんで――そんなことわかるの？』
あら、言ったはずよ。私は君のすべてを知ってるって
君の未来だってわかるんだから、勿論、君の今ぐらいすぐわかるわ。
『ねぇ、君は誰なの？』
だめ。まだだめだよ。ザイン。
それはまた今度。今は自分のしたいことを思いついたままにしなさい。
そうすれば自ずと君は記憶にたどり着けるわ。
でも、私は忠告はするけれど強制はしない。
いやならいつでもやめていいわ。
それは君次第。昔、約束したのは君で、私ではないんだからね。
『え？』
あら、もう時間は終わりみたい――
もう、私からは多分呼びかけないわ。君が呼べば私は来るけれど。
最後に言っておくね。ラノ・ウウスのほうに彼らは向かったわ。
次第に彼女の声は聞こえなくなった。そして、急に風が吹き、僕は――

『――丈夫？大丈夫？』誰かが体を揺さぶった。僕は目を開いた。
『え？あれ・・・・・・・』
ここは、何処だろう？舞台裏だと認識するのに少し時間がかかった。
『よかった――。死んじゃうのかと思った。』何処かで見たことのある女の子が呟く――『フロ―ったら危ないことするんだから。』

『ネネさん――？』僕は訊ねる。そうだ。ショーの最後で綱渡りした女の子だ。僕は思い出した。
『覚えてくれてたんだ。』ネネは言った。『ごめんなさいね。フローが八つ当たりしちゃって。貴方は何も悪くないのにね。』
『ザインです。』
僕は言った。そうだ！笛を盗んだ奴らが何処に行ったかこの人たちに言わなければならない。たしか――何処だっけ？ラノ・ララクじゃなくて――えぇっと・・・ラノ・ウウスだった気がする。
『あの――ネネさん？』僕は彼女に呼びかけた。『ラノ・ウウスってご存知ですか？』
『えぇ・・・』彼女は答えた。『この城下町より少し西にある大聖堂のことでしょう？確か何かの怪物だったかしら――を祭っていたんだけれど、今は廃墟と化していたはずよ。』
廃墟――か。隠れるのにはもってこいの場所だ。ここからそう遠くないところのようだし、あのお告げは本当だろうか？
『けど、どうして？』
『そこに――あると思います。フローさんの笛。』
『え？』
『わからないんですが――多分、そこにある気がします』
どうして？って訊ねられても説明のしようが無かった。まさか、心の声が聞こえたなんて言う訳にもいかないだろうし、何故彼らがそこにいるか明確な理由が見つからなかったからだ。
しかし、幸いなことにネネは訊ねなかった。焦ってそれどころではなかったのだろう。
『わかりました。今は皆彼らを探しに町に散らばってるので、私たち二人で行きましょう。』

第二章　フェニックス　＊１０＊　奪われた笛（後書き）

上手くかけませんねぇ・・・・

第二章　フェニックス　＊11＊　ラノ・ウウス大聖堂

僕は今、ネネとメッカの町からラノ・ウウスを馬車で移動していた。その間に彼女に色々質問してラノ・ウウスについて知ることができた。

とにかくあの大聖堂についてわかったことは二つ――。

一つはあの大聖堂は元々、青の魔導士会という胡散臭いアーチナラル民主共和国にある士会の聖堂だったそうだ。しかし、当時の国王が死に、その次に国王を継いだ者が鎖国したため、大聖堂からは人がいなくなり、廃墟と化した。以来、大聖堂では闇取引が行われたり、幽霊や怪物が出るという噂が流れたため、いつしか闇の聖堂とも呼ばれるようになってメッカの人々も近づかなくなったという。彼女の話でもう一つわかったこと。それは、あの大聖堂に隠された秘密についてだった。

青の魔導士会が作ったものかはわからないらしいが、地下に残された跡には、古代創世記という（詳しくは知らないが、エリンスの図書館で読んだ本の中に“古代創世記”についての記述があったので、名だけは知っていた。）遥か太古からあった本の序文がアラル・ラノルルという特別な文字で壁に綴られている、ということだ。この事はメッカの人でも殆ど知らないという。

僕がラノ・ウウスに理解し終えたところで、ネネは僕に訊いた。

『ところで、ザイン――君。何処から来たの？』

『僕ですか？僕はエリンスから来ました。』僕は答えた。

『エリンスか――。変わってるんだね。』

『どうして？』彼女が僕に何を求めてるのがわからなかった。

『なんか北っぽい話し方するからさ。』ネネは言った。『豪快な南の人はね、大抵“俺”って言うんだよね。控えめな人でもさ。だから、北の方で産まれて南に最近来たんじゃないかと思ってさ。まぁ、両親が北産まれとか友達が来た生まれでそうなる人も居るから、一

概には言えないけど。』
そういえば、エリンスの人たちは皆、豪快に俺といってたっけ？或いは私とか。そう考えると僕だけだった気がする。一人称が僕なのは。
『よく知ってますね。そんなこと。』
『サ―カスやってると嫌でも身についちゃうんだよ。人の見分け方みたいなの。』
バシッ
ネネが鞭を放つ音がして、馬は加速した。
『ほら――もう、見えてきたわ。』
暫く進むと、ところどころ風化し荒れ果てた廃墟が見えた。
もうあたりは真っ暗になっていたが、その跡は闇に包まれながらもはっきりと見えた――

時、同じくしてラノ・ララク内部
『何処まで逃げればいいんだ？』男は言った。『というか、あの時目の前にいた男の子が追ってきてるって本当か？』
『私を誰だと思ってるの？』イザベラは笑った。『名高い女盗賊、イザベラよ。』
『でも、なんでここがわかったんだ？』男は不思議そうにイザベラに訊ねた。『まさか奴がここまで尾行けてきた訳じゃあるまいし・・・細心の注意は払ったんだろ？』
『えぇ――』イザベラは言った。『できるだけ見つからないように、殆どのものに気付かれぬようにここまで来たの。事実、盗んだのを誰にも知られなかったはずよ。』
苔に覆われ風化した扉を開けると階段が見えた。ゆっくりと一段一段踏み外さないように降りる。途中、蛇が寄ってきたが無視して更に下の方に進んだ。
『全く、何処まで降りんだよ？』
『奴らの足音が聞こえなくなるまでよ。』イザベラは自分の耳を人

差し指で触った。『未だ奴らの足跡が遠ざかってないから』
イザベラの耳には特殊な装置が組み込まれており、狙ったターゲットに発信機のようなものを付けることで半径メートル以内に近づくと音で場所がわかる。（遠いと小さい音、近いと大きい音といった風だ。）イザベラによるとたまたま偶然落とした発信機がたまたま偶然前の席に座っていた少年にくっついたそうだ。本当に偶然なのか、その少年が追ってくるととわかってくっつけたのか男にはわからなかったが、そのことに関して質問するといつもイザベラははぐらかした。
『建物の中に入ったみたいけど――この練じゃないみたい。』
『本当か――？』
男は安心し、ポケットから笛を取り出した――

第二章　フェニックス　＊１１＊　ラノ・ウウス大聖堂（後書き）

少し短かったかもしれませんがお許しください。
あぁあ、暫くでない予定なのでエラノールとオストルドが恋しくなりました・・・

第二章　フェニックス　＊12＊　闇

ここにて遡ったトキは戻る――
『見つけたよ。』
イザベラの言葉は僕の言葉に遮られた。
『ち、会話にきぃ取られてて・・・』イザベラは後ずさった。『こいつらからその笛守ってくれよな。約束の倍払うからさ。』
『約束だぞ。』
男がイザベラの前に出て僕らに立ちはだかった――。イザベラが笛を持ち、更に奥深く階段を下った。
『お前らナニが目的だ？』男は言った。『どうせ、金だろ？あの笛を返せば金がもらえる、だから欲しいんだろ？だったら――』
不意に男の後方で爆音がして天井が崩れ落ちた。

一瞬だった――

男は天井から落ちてきた岩に潰された。僕は足にネネは手に軽い怪我をしたが、岩が頭上から落ちてくることはなかった。僕は岩に潰された男を覗いた。
『こいつ――死んでる・・・？』
少なくとも男はピクリとも動かなかった。幸いなことに彼の頭は今居る場所から見えなかったので彼からもし脳味噌が飛び出ていたとしても死んでいたとしてもわからなかった。
『さっきの爆発――なんだったのかしら？』ネネは僕に訊ねるように言った。『あの女盗賊さんかしら？それとも――』
僕は背筋がゾッと寒くなった。誰か――侵入者が居るのだろうか？僕達の命を狙っているのだろうか？不安が不安を呼び頭の中を駆け巡った。
『でも――いかなきゃね。』ネネは自分に言い聞かせるように言っ

た。『ここまで来たんだもの。行かなきゃ。』
彼女の必死な姿が不謹慎にも可愛く見えた。

『タスケテ。タスケテよ』

不意に、忘れようとした、昔のあの光景が目に浮かんだ。

『うん。そうだね。行こうか――』一瞬戻ろうかと諦めかけていたけれど、僕は先に進むことにした。
階段を下り、奥に進むにつれ、辺りはいっそう暗くなっていった。
階段を抜ける風がやけに冷たく感じる。時折、ピュゥゥゥと音がした。

『何処まで続くのだろう?』
僕は呟いたところでふと足を止めた。暗くてみにくいが何か壁に文字が彫ってあった。
『どうしたの?』ネネが訊ねた。
『いや、なんか彫ってあるんだ・・・・』
見たことの無い文字だった。僕達が普段使っている文字より少し丸っこくてなんか変な感じがする。でも、何だか懐かしく感じた。
『ど〜れ?』ネネは僕に近寄って彫ってある部分を覗いた。『これよ。』
『どうしたの?』
『ほら、馬車で言ったでしょう?アラル・ラノルルという文字で壁に古代創世記という文書が綴られているって。』
『あぁ――』そういえば、そんなこと言っていたいたような気がする。『それにしても長い文章だな・・・・』
『言い伝えによると、古代創世記は全五十章から成るとても長い文章なの。ここに彫られているのは序文だけだけど・・・・』
『ネネはさ――アラル・ラノルルっていう言葉読めるの?』
『ううん。』彼女は答えた。意外だった。『全部は読めないわ。』

『そうなんだ・・・・』
僕は言い、女盗賊を追いかけるべく更に階段を下った
そこはとても大きな広間だった。辺りは壁で覆われていて、パッと見ただけでは入り口はここしか見当たらなかった。
『まてよ。女盗賊――』僕は女盗賊の姿を見つけ、言った。『盗んだ笛を返せ』
『勇敢な少年ね。ナニが目的かしら?』彼女はちっとも動じず、答えた。
『笛よ!』ネネは言った。
『嘘ね。どうせ、この笛の持ち主――名前はなんと言ったかしら?そう・・・フロ―だったわね。あいつに雇われたんでしょう?』
『違うよ。』僕は即答した。『お金を詰まれたわけでもないし、探してって言われたわけでもないよ。』
『じゃぁ――――なんで?』
“ここに来い。”って言われたんだ』僕は続けた。『言った相手は誰だかわからないけれど――、聞こえたんだ。、笛を盗んだ犯人はこの聖堂にいるって。』
女盗賊は唖然と僕を見つめた。振り向くと、ネネも同じように唖然と僕を見つめていた。
『で、私をどうしようってわけ?』
『別に。笛さえ返せば、それ以上何もしない。』
『でも、私――悪いけど返す気ないわ。』女盗賊は言うと、後ろに後退した。『じゃぁね。勇敢な少年君。』
一瞬のうちに僕とネネの周りは煙で覆われ、彼女に逃げられた――。いや、僕にはそう、見えた。だが、実際は違った。彼女は僕の目の前から一歩も動いていなかった。
『え?』
僕は素っ頓狂な声を上げた。さっきの煙で彼女は勿論逃げると思っ

ていたし、一歩たりとも煙が立ち上がる前から彼女が動いているように見えなかったからだ。一瞬罠さえ仕掛けてあるのかとも思った。
『何で・・・・』
『キャァァァ――――』
不意に女盗賊は声を上げ、空中に浮遊した。
『何が・・・・？』未だ自体が飲め込めない僕は、ネネのほうを向いた。ネネは震えていた。『え？ネ・・・・・・ネ？』
ガタガタ震えるネネを僕は見つめた。彼女の瞳には僕には見えない“何か恐ろしいもの”が見えているのだろうか？
『闇が――――』ネネは呟いた。
『闇？』俺は女盗賊のほうを振り向いた。『手――か？』
手のような形をした黒い煙が彼女の体を渦巻く。次第にそれは濃くなりつつあった。
『あっ――あん・・・あ〝あ〝あ・・・・』
体が闇に飲まれ、彼女は声を上げた。闇は更に体を包み込み、もう、彼女の体は殆ど見えなくなっていた。
この闇何処から出ているんだろう？僕は思った。何しろ、ただでさえ真っ暗闇の中、暗闇の発信源を特定するのは至難の業だ。唯一つきりの救いは、彼女が松明を未だ放していないことだ。あれさえ彼女が放さなければ、彼女を見失うことはない。僕は辺りを見回した。
『何処から、闇が吹き出てるのだろう？』
見回している間にも、闇は広間までも覆いつくすように更に濃くなっていった。とうとう、女盗賊が持っている松明を落としたようだ。自分の周り以外見えなくなった。
『！！！』

風が吹いた――

人が一瞬見えた。
その飄々とした姿の正体は後ほど語ることになるが、とにかく、そ

の人物は床に落ちていた銀の燭台を手に取ると、何か意味不明な言葉を呟いた。

『ラ・メロディ・ラライテス・グラパ・ド・アバセス』

何かの文様が床に浮かび上がるのが見えた。

その文様から光が溢れ出し広間全体を照らした、謎の人物が持った銀の燭台は溶け出し、闇は光に包まれ女盗賊は床に投げ出された。

『――――ララテイス・ボン』

一瞬のうちに文様は消え、彼の手から銀の液体が流れ落ちた。

『だ、誰・・・』僕は呟いたが、もう彼の姿は無く、目の前には女盗賊が横たわっていた。

第二章　フェニックス　＊１２＊　闇（後書き）

長らくお待たせいたしました。
いや～ヤバイヤバイ
自分の作品がとある某作家の超有名作品と展開が酷似しまくっていました。昔――といっても数年前ですが、読んだのが頭に残っいたんだと思います。
ってなわけで、第三部からは、できるだけ酷似しないように頑張ります。それにしても、難しいなｗｗｗ
あっ、そうそう下の部分を追加したんですが、本当は謎の男が呟く言葉、フランス語だったのですが、ＹＡＨＯＯなどの翻訳ソフトでは変な意味もついてしまうので、この世界で使われる架空の言葉にしました

第二章　フェニックス＊１３＊　創世の欠片

僕は女盗賊に駆け寄ると、脈に触れた。幸い、脈はあるようだし、息もしている。気を失っているだけのようだ。ホッと溜息をつき、笛に手を伸ばした。

『！！！』

笛は砕けた――――。否、この場合比喩としては崩れたという方が正しいだろう。まるで、炎の渦に襲われた品物のように灰となって、地面に流れ落ちた。

カランコロン

流れ落ちた灰の上を一粒の透けた玉（ぎょく）が零れ落ちた。

水色の綺麗な玉、暗い中でもいちだんと輝きをはなっていた。

『Ａ　ｆｒａｇｍｅｎｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ・・・・』誰かが呟いた。振り向くと、ネネが立っている。女盗賊も目を覚ましていた。『え？』僕はまた、予期せぬ出来事に素っ頓狂な声を上げた。

『世界の始まりの断片――――通称・創世の欠片。持っている者の大半が正の怪奇現象を受けるといわれている・・・・』誰かに心を奪われたかのようにネネは静かに語りだした。『元々は、一つの石だったといわれ、遥か北の森に封じられた最強のドラゴンが身につけていたといわれていて、その石があればどんな願い事でも叶うとも言われている・・・・。』

願い事が叶う・・・か。彼女は何か願い事をかなえたかったのかもしれない。

例えば、家族が病気だったり、死んでしまっていたり。

もしかすると、僕みたいに記憶を失っていたのかもしれない。

そう思うと、僕は彼女が可哀想に見えてきた。

『でもね。盗賊さん。たとえ、理由があろうとも窃盗は犯罪よ。』

彼女は諭すように気を失ったままの女盗賊に語りかけた。『貴方の

気持ちはわからなくも無いけれど。盗まれるほうになって考えてみたらどう？』
『私には関係ないことよ――――』
『貴方に・・・・・良心は無いの？』ネネは目から今にも涙があふれ出そうになっていた――
きっと、彼女人の為に泣いてあげられる優しい人なんだろう。僕の胸の奥が熱くなった。
『良心？そんなモノずいぶん前に捨てたわ。』
『でも、昔はあったんでしょう？』
『えぇ、あったわ。兄と両親が殺されるまではね。それからは、人殺しても、モノを盗んでも何も感じない。唯、事実としてそれを受け入れる。』
やっぱり――――会ったときからこの人の瞳は僕らなんか映していなくて、悲しみを映しだしていた。
本当はお宝なんて欲しくないんだよ
本当は人の命だって、いらないんだよ――――何もいらない。
唯、両親が生きてて欲しい。兄に生きてて欲しい。
何で死んじゃったの？何で殺されなきゃならないの
なんで普通の人のように暮らせないの？
私は間違ってない。人が人として平凡な暮らしを求めることに何の間違いがあるっていうの？
彼女の瞳が僕に訴えかけてくるような気がした
『嘘だ。良心、君には残っているはずだよ――――。ずっと残ってて、傷ついているはずだよ。』僕は耐えられなくなって、女盗賊に言った。『あの、男の人死んだとき、貴方何か呟いてたよね。“ごめん”とか、“あとで弔ってあげるから”とか、泣きながら――――。』
『・・・・・』
言葉が詰まった。
これ以上、彼女にかける言葉が見つからなかった。
沈黙が暫く続いた。

『何で、私ばっかり。』
『え？』
『何で私ばっかり、こんな運命を辿るの？教えてよ――――ねぇ、教えてよ。どうせ、貴方も私をお尋ね者としてメッカ自警団に突き出すんでしょう？』
『いや、違う。』
『じゃぁ、体？私の体が目的なわけ？』
『違うよ。』僕は強く言った。『別に君を自警団に突き出す気は無いし、君の体が欲しいわけでもない。君は自由にさせてあげる。但し、笛だけは返してもらうけどね。』

何かがプツンと切れた。

ダムが決壊したように、彼女の頬から涙が溢れ出した。
冷たい感触が僕の胸まで伝わってきた――――

夏を告げる陽光が地面に降り注いだ。
ここ、メッカではそれでもめげずに国中から押し寄せてくる旅人やこの地に生む住人相手に商売を続ける。
だから、いつもなら『いらっしゃい』の一声が聞こえる場所――――。
もう、そこでは、声は聞こえない。
この場所で、公演をしたフリーク団は笛の盗まれた事件より一ヵ月後、公演を終え、町を出て行ったからだ。ネネは、この町から出る直前、僕達と会い、『安心して。フローには、言わないから。』と言って町を出て行った。
結局、この一件で僕は何もできなかった。
今更ながら、自分の無力感を感じた。

『ラ・メロディ・ラライテス・グラパ・ド・アバセス』

あの、謎の男が呟いていた言葉を僕は呟いて見た。
涙があふれ出た。
『ぼくは、まだ無力だ。弱いのだ・・・・・・』
僕はなんて弱いのだろう？滑稽なのだろう？身の程知らずなのだろう？
あの時の光景が、脳裏に蘇った。

第二章　フェニックス＊１３＊　創世の欠片（後書き）

長らくお待たせいたしました。第二章完結です
第三章はいきなり作者としても想定外の展開になりそうです、

第三章　空＊１４＊　滑稽

ぼくは誰なのだろうか？
過去の記憶が無く、言葉以外は何もわからない。
自分が何をしていたか
何処にいたのか
何故ここにいるのか
自問自答を何度も繰り返した
誰も答えてはくれなかった
何もわからなかった

四年前―――
その日ぼくは図書館にいた。
それは毎日の習慣になっていて、小母さんに連れてこられて以来、毎日欠かさず来ていた。
友達はいなかったし、ぼくは別にここで過ごすことは嫌じゃなかった。
表題『メッカ市』
黄色い背表紙の綺麗に装丁された本で殆ど触った形跡は見られない。
『痛！』
本を開くと、一枚のメモ用紙が舞い落ちた。それで指を切ってしまったらしい。
『gΩｆｄｇｊｌσ▽ｋａｈ○×！！！ｊｉｇｅｒｚｏｉｗａａａω・・・・』
メモを僕は手に取った。見慣れない文字が並んでいる。ぼくは訳がわからなかったので、本の後ろにそっとしまいこんだ。
『この本には、ぼくの過去に関することが何か書いてあるかもしれない。』
繰り返し、繰り返し呟いてきた言葉。

何度も何度も同じ言葉を繰り返し、毎日毎日図書館にある本を読み耽っていたけれど、一度だって真相に近づいたことが無かった。それは単にぼくが無知なだけかもしれないし、本当に記述されていなかったのかもしれないけれどぼくにとって、“過去を知る手立て”は、今のところここしかなかったし、文字を学ぶ手立てもここ以外何処にも無かった。
勿論、その日もいつもと同じ。唯、脳内に知識が追加されるだけだった。
『だ～れだ？』
ふと、休憩していたら誰かがぼくの目に手を当てた。
『エラノールさん・・？』
『えへへ。当たり♪』振り向くと、エラノールは殺人的な笑顔でぼくを迎えてくれた。
服は黄色の少し小さめのワンピで、ビーチサンダルを履いている。
『どうしたの？』
『う～んとね。う～んとね。空綺麗だよ。あそぼ！ザイン君・・・・』
『え？。』ぼくは丁度読み終えた本を本棚に戻すと、一緒に外に出た。

空は綺麗だった。
雲ひとつ無い青空――――
でも、何故だか不安になった。

『ん？』
彼女はぼくの顔を覗く。築いたら無意識のうちに彼女を見ていたようだった。
『なんでもない。』ぼくは笑顔で答えた。
『そっか。』
『ねぇ』彼女は続けた。『からすのすくう森にいってみない？』

『え？』
『綺麗なんだよ。とっても。あの奥にあるれいの湖。昔ね。お父さんに連れて行ってもらったことあるんだ――』その日、元気が無かったのか、受け答えしかできなかったぼくに彼女が一生懸命話してくれたのを覚えている。
そう――もし、この時、ぼくがちゃんと受け答えしていれば大丈夫だった。
彼女があんなめにあわなかったと思う。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
鴉の巣食う森――
いつからそんな名前で呼ばれていたのだろう。
とにかく中は薄暗くて、恐ろしく気味が悪かった。
中ごろまで歩いたとき、エラノールが口を開いた。
『ザイン君、ここ知ってる？』
『知らない。』
彼女が何故ここに連れてきたのかわからないぼくは、そっけなく答えることしかできなかった。
『そう・・・・』彼女は頷いた。
暫く――沈黙が続いた。
ようやくぼくが口を開いたときはもう、森は抜け出していた。
目の前に、大きな湖面が広がった。
『マブし！』
目がくらんで慣れるのに時間がかかったが、空から照りつける陽光に感謝した。
『綺麗・・・・』綺麗に陽光を反射する湖を見てぼくは呟いた。
『でしょ～！』彼女は無邪気に笑う。その笑顔を見ていると僕の心は安らいだ。
魚がピチョンと跳ねた。

水の中を覗くと、水はとても透き通っていて、魚がいっぱい見れた。
隣にいたエラノールは水を手ですくうと、ぼくの顔にバシャッとかけた。
『ちべて・・・・』
ぼくは思わず笑ってしまった。いつの間にかぼくはニッコリ笑っていた。
それから暫くぼく達は水を掛け合い、笑いあった。
『ザイン君ッてさ、どうして、他の子達と遊ばないの？』二人ともびしょ濡れになった後、彼女はぼくに尋ねた。『だって、こんなに楽しいんだよ？』
『そうだね。遊ぶのも悪くない。でも――――』
『でも――――？』
『ぼくと遊んでくれる人なんていないでしょ？』
『そんなことないよ！ザイン君優しいもん。私知ってるよ。村の子達に虐められてた動物を助けてあげたりしてたじゃない？』
『そうかな――――』
僕は褒められて照れ臭くなり、顔が真赤になったのを隠そうと水の中に身体を沈めた。
そして少し岸にいる彼女のところから離れると再び浮上した。
その、岸から離れたことが原因だったと思う。

突然、僕の周りの水に波紋が沸く。

『え？』
一瞬だった。でも、すごく濃い一瞬だった。

『キャアアアアアア・・・・』

彼女の悲鳴が聞こえた。けれどぼくは動けなかった。

第三章　空＊１４＊　滑稽（後書き）

いや～ようやく終わりまでのめどがたちました
全部で四部構成。章の数は１５！
因みに、この“空”と言う章はあと二話程度です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7404b/

A trip in search of something～失われた記憶～

2010年11月14日03時01分発行